



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴルにおける日本人抑留者 1945-1947年
Author(s)	クズネツォフ, セルゲイ・イリッチ; KUZNETSOV, Sergey; 兎内, 勇津流//訳 他
Citation	北方人文研究, 12, 155-165
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73550
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_42_Kuznetso.pdf



モンゴルにおける日本人抑留者 1945-1947 年

セルゲイ・イリッチ・クズネツォフ
(イルクーツク国立大学歴史学部)

訳：兎内 勇津流
(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

要旨

この論文では、1945-1947 年のモンゴルにおける日本人抑留の原因と結果について検討する。史料と文献について概観し、モンゴルにおける収容所の地理的配置と、モンゴル経済におけるその労働力の使用について示す。抑留者の死亡率とモンゴル人民共和国領内の埋葬地、祖国への帰国についてのデータを挙げる。モンゴルにおける日本人抑留者に関する歴史的記憶の保持についての資料が含まれる。

キーワード：1945 年ソ日戦争、日本軍捕虜と抑留者、モンゴル人民共和国領内の軍事捕虜収容所。帰国、歴史的記憶、モンゴル人民共和国における日本人の埋葬。

日本軍のモンゴル抑留の国際法的問題点

1945 年のソ日戦争の終了後、モンゴルは、他の多くの地域と同様、中国北部から来た日本の軍人と民間人の抑留地となった。日本人がモンゴルに抑留された状況について説明しておく必要がある。第一に、モンゴルは 1936 年の相互援助議定書によってソ連邦に結びつけられ、事実上その衛星国となっていて、ソ連邦はその国土を自国のように使用し、たとえば軍を配置することが可能だった。議定書の第 2 条は、外部から攻撃があった場合の相互援助を想定していた。この議定書の精神に従って、1945 年 8 月 10 日、モンゴルは日本に宣戦布告した。しかし、この議定書は、第 3 国からの攻撃があった場合についてのみ、参戦することを規定していた。国際法の規範に適合するような、別の宣戦布告の根拠の存在は認められない。しかしながら、モンゴルの指導部は、宣戦を布告することによって一定の利益が得られると考えた。モンゴルのホルローギーン・チョイバルサン首相 (1895 ～ 1952) は、モンゴル人民共和国の対日参戦は、共和国が内蒙古およびバルガを併合することにつながると考えた [8, 216]。ほとんど無償の労働力である抑留日本人がモンゴルに来ることは、モンゴルの政権にとって、わずかではあったかも知れないが「慰め」だったと考えられる。モンゴルの宣戦布告そのものは、両国の力がまったく釣り合わないことから、一種の珍事とみなすことができる。このような形での参戦は、「長兄」の援護があつてのみ可能だったことは明らかだ。参戦の直前に、チョイバルサンがヨシフ・スターリン (1879 ～ 1953) に対して、モンゴル軍が必要とする、新しい戦闘機と 3 万人のモンゴル人兵士の完全な兵装を含む部品、燃料、兵器の供給を完全に充足するよう依頼したことは、無駄なことではなかった [1, 197]。

対日参戦布告と、軍事捕虜のモンゴル移送について、ソビエトとモンゴルの間で合意があったことを示す文書は、まだ公開されていない。何人かの研究者は、スターリンとチョイバルサン首相が

1945年7月5日にクレムリンで会談した際、そうした合意に達した可能性があると考えている[9, 112]。この会談は短いもので、スターリンの来客日誌によると全部で35分だったが、扱った問題は非常に重要なもので、当時進行中だったソ中交渉とモンゴル人民共和国の地位、ソ連邦とモンゴル人民共和国の対日参戦がそこに含まれる。この時以外にチョイバルサンは、1944年1月22日と1946年2月22日の2度モスクワでスターリンと会談し、その後はソチで何度か会談した。彼等の協議記録は出版されていない。

ソ日戦争へのモンゴル軍の参加は、兵力が小さく、訓練が十分でなく、戦闘経験を欠いていることから、相当にシンボリックなもので、補助的かつ限定的なものだった。

さらに2つの契機があった。モンゴルが軍事衝突の犠牲者に関するジュネーブ議定書に加入したのは1977年のことであり、日本との外交関係は1972年に成立した。おそらく、これらのことが1945年に何らかの役割を果たすことはできなかったであろう。1935～1945年に日本が与えた損害の補償を求めたチョイバルサンは極東委員会宛て書簡を引用して、モンゴルの歴史家バトバヤルは、以下のように述べた。「モンゴル人民共和国に対する日本の攻撃の結果、モンゴル陸軍は、この期間に2039人を失い、同じ時期に日本の攻撃がもたらした損失は、総計3億2198万3千トゥグルクに達した。」[11, 164-165]。実際、この時までには日本人の抑留はすでに行われていて、この書簡は、「後追いで」それを正当化するかのようには送られた。

モンゴルの文書館史料を分析したモンゴルの歴史家チョローン・ダシダワの意見では、1945年8月末、モンゴルの政権はすでに軍事捕虜となった日本人の到着(抑留)について知らされていたという。1945年8月31日、モンゴルの閣僚会議において、モンゴルにおける日本軍人捕虜收容所管理部を設置する決定が採択された。

史学史と史料(モンゴル、日本、ロシア)

日本人のモンゴル抑留のテーマは、おそらくは史料の欠如もしくは利用困難のため、最近まで非常に不活発な研究状況だった。一般向けの啓蒙書として、Ch. ロブサン - オチル(1998年)、E. ロブサンバルダン(2001年)、Ch. ダシダワ(2007年)の本が出ている。ロシアにおいては、中央軍事文書館にいくつかの史料があり、イルクーツクの歴史家セルゲイ・ヴラジーミロヴィチ・カラセフがそれを出版し[3, 4]、2013年には、ウラン・ウデの歴史家レオニード・ヴラジーミロヴィチ・クラスがそれに触れた論文を書いた[6]。彼はまた、B.D. ツィベノフと共著で、モンゴルにおける日本人の人数と生活状況についての論文を発表した[7, 245-252]。2013年にモンゴルでダシダワの大著が出版され、現在、これがおそらくこのテーマについての最も重要な業績と考えられる[13]。この本は、ロシアとモンゴルの文書館史料に基づいている。最後のものは、モンゴルにおける日本人の生活条件と仕事を研究する上で、特に重要である。最後に、日本で2017年にこのテーマを扱った論文集が刊行され[17]、エレナ・カタソーノヴァ、オレーグ・バザーロフ、富田武などの、捕虜をテーマにした著名な研究者たちの論文が収録されている[2, 10]。

1949年に日本の長野で、モンゴルに抑留された日本人の最初の回想録が出版された。著者は、吉村隊長配下部隊と一緒に勤務した、山浦重三、蒲原正次郎、石井栄次[クズネツォフ原文ではヤマウラ・ショウゴ、ヤマウラ・シミズ、カンバラ・シンジュウロウ、イシイ・エイジだが、図書館の目録データに合わせた一訳者]である。この本で初めて、ウランバートルの日本人がどのような仕事をしたかが列挙された[20, 9]。元抑留軍人たちが著した回想録の中に、モンゴルにあった捕虜の

ための病院にいた時のことを書いた、山辺慎吾の著書を挙げることができる [19]。1988 年に東京で、元軍事捕虜の回想録シリーズのうち、ザバイカルとモンゴルについての回想を収めた特別の巻が出版された [21]。この巻にモンゴルの収容所についての回想を寄せたのは、フジタ・タケシ、米岡隆吉、山宮正敬、久保田設司、河野薫祐、小幡良輔、和田福由、村本浩である [クズネツォフ原文と若干違うが、当該書籍により一部を改めた一訳者]。桜田虎夫 [18]、久保田設司 [14]、長島秀夫 [16] は、モンゴルにおける日本人の収容所生活について、我々の観念を大きく広げる興味深い回想を著した。

人数と配置場所

1945 年にモンゴルに抑留された日本人の数については、いくつかの意見が存在する。数字の相違は、われわれの見解では、計画上の抑留者の人数と、実際にモンゴルに送られたその数が一致しなかったことによる。また、抑留者は、ソ連に戻りあるいは日本に帰国した等により、絶えず移動があった。たとえば、モンゴルでは住居、物資、食料がないために大人数の日本人を受け入れできないことが判明した。それと同時に、モンゴルには大人数の抑留者にとっての労働の場が十分に存在しなかった。例えば、ウランバートル - ナウシキ間の鉄道建設は、大量の軍事捕虜を使用する可能性があるものだったが、停滞していた。モンゴルにはそのための資金がなく、当時のソ連邦では、占領から解放されたそのヨーロッパ部分を復興することがもっと緊急の課題だったからである。

ロシア連邦国防省中央文書館には、ソビエトの下部機関が日本の軍事捕虜と戦利品資産をモンゴルの政権に分与することについての文書がある。日本の軍事捕虜と戦利品資産の分与についての問題がモンゴルで最初に提起されたのは、1945 年 9 月 4 日である。この時期、要求可能な捕虜の数は 1 万人と決定された。モンゴル人民共和国への捕虜の移管についての別の文書は、1945 年 9 月 24 日付けの「ザバイカル戦線地区への軍事捕虜の移動に関する報告書」である。この文書には、第 80866 輸送列車および第 80899 輸送列車として、ムクデン (瀋陽) 駅から国境のナウシキ駅に向けて、モンゴル人民共和国のために 3000 人が出発したことが記されている。

1945 年 12 月 7 日付けの、捕虜とした日本軍人の数についてのソ連邦内務省軍事捕虜・抑留者管理総局長代理の報告には、以下のような指摘がある。「軍の指揮下での労働のためにソ連邦の外に残された者がおり、その中には、モンゴルにいる 58500 人が含まれる」[10, 42 頁]。2 万人という数を挙げる文献があり、18010 人とするものもある [5, 260 頁]。ロシア国立軍事文書館の文書によれば、1947 年 5 月 8 日時点で、モンゴルには 12318 人に日本の軍事捕虜がいたという。この数字には、608 人の将校、2263 人の下士官、8079 人の兵卒および 1368 人の文民である鉄道員が含まれる。この日までに、モンゴルでの捕虜生活で 1323 人が死亡し、1308 人が入院治療中である [3]。

日本人の帰国に関する報告からは、何か結論を導くことができるであろうか。1947 年 10-11 月に、ナホトカの中継収容所にはモンゴルから 10685 人の日本軍の将兵が到着した [10, 442]。モンゴルの歴史家ダシダワーの見解では、モンゴルは、2 万人の日本人を受け入れる用意がなかったため、約 7 千人がソ連邦のシベリアと極東の各地区に転送された。この推測は、文書によって確認されているものではない。

軍事捕虜のモンゴル内の配置場所までの輸送は、ハルビン - 満州里 - チタを通過してナウシキ駅まで通じていた鉄道によって行われた。その先は、自動車もしくは徒歩の隊列で、モンゴル入国管理所のあるキャフタに向かった。抑留者が、ソ連領内を通過せず、中国北部から徒歩の隊列によって直接モンゴルに入った事実も知られている。これについては、今のところ文書で確認されていない。

日本人の収容所は、セレンゲ、中央(トゥブ)、アルハンガイおよびウランバートルの4県に設置された。日本人の第一陣4965人は、ナウシキ駅から徒歩で、国境のすぐ近くのスフバータル市に1945年11月20日に入った。それ以後のグループは自動車で、キャフタを経てアルタンボラグに、11月23日に1404人、12月4日に1479人、12月5日に1494人、12月9日に1497人、12月10日に1458人が輸送され、全部で12288人となった[5, 262]。

抑留者の中には約1188人の文民と2人の女性さえいた。彼等の中には、多くの病人がいたため、移動は体力的に厳しく、北モンゴルでの気温は11月末から12月初めは、通常マイナス20度以下に低下するのである。モンゴルに抑留された軍人の大多数は、中国東北部のハラチン地区[遼寧省の喀喇沁左旗のこと・訳者](張家口山脈の麓の熱河河谷)で勤務していた。文民の中には、労働者、農民、技師、医師、鉄道員、建築作業員、電気技師等々、あらゆる職業の者がいた。このグループの抑留は、全般的にどのような理由によっても説明できない。

軍事捕虜・抑留者局は、モンゴルでは1945年10月12日に設置された(ソ連邦における同種機関にならって)。37の軍事捕虜収容所支部がその管轄下に置かれた。ウランバートルの「中央」収容所に839人、「第五工場」に1409人、「第一コロニー」に940人、ツァガーンホーランの「白い兵舎」に648人、スフバータル市に500人、アルタンボラグに300人が配置された。収容所はまた、アムガラ、ホジルボラン、ツァガーンホーラン、ボルノール、ズーンブレ、ズーンハラー、ナライハ、ジャルガラント、オギー・ノール湖畔にも置かれた。基本的に、収容所はソヴィエト・モンゴル国境に近いアルタンボラグからウランバートルに向かう南北の線に沿って配置された(地図1を参照)。



地図1. モンゴル人民共和国内の日本人収容所配置

ウランバートル市 1. ホジルボラン 2. ダンバダルジャー 3. ショホイ・ツァガーン・ボラグ 4. ナライハ
セレンゲ県 5. ズーンブレ 6. スフバータル 7. アルタンボラグ 8. ユルー 9. バローンハラー 10. ズーンハラー
アルハンガイ県 11. オギー・ノール トゥブ県 12. アルホスタイ 13. オグタールジャルガラント 14. ボルノール、
ウフルチョロート 15. バトスンベル ヘンティー県 16. バルジ

抑留者の労働、収容所の状況、生活状況

戦後のモンゴル経済は、厳しい状況にあった。それは、ソ連邦からの供給とソビエトの設備、技術、建設資材の援助に大きく依存していたが、戦時中、援助が大幅に削減されたのである。例えば、石油製品の供給は2分の1以下に削減された。小規模の工場といくつかの炭鉱は稼働していた。小規模な建設が、主に首都において行われた。ナウシキ-ウランバートル間の鉄道建設のような大きな建設事業はようやく1947年に始まったが、日本人はその時基本的に帰国した後だった。

日本人抑留者は、モンゴルにおいて、服や靴をつくる作業場で働いたり、大工をしたり、皮革工場で働いたり、ナライハ炭鉱で石炭の採掘をしたり、食品工業や建設業(橋や道路の補修)の仕事をした。建設資材を生産する企業では、煉瓦工場で働いたり、碎石や砂を採取した。自動車運送業で運転手や整備士、荷役夫をする者もいた。農作業をする作業隊もあった。約80人の軍事捕虜は、オギー・ノール湖にある特別収容所に送られた。彼等の仕事は魚を捕って、モンゴルの収容所にいる軍事捕虜たち全体に魚を供給することだった。252人以上の者が、ボルノール収容所で農業と蔬菜作りに従事した。ズーンブレン収容所では、156人が小麦を育てた。日本人は、ウランバートルで約30の建物の建設に参加した。その中には、政府庁舎、劇場、外務省、ホテル、映画館、文化の家、その他がある。首都の中心にあるスフバートル像の土台作りにも日本人が参加した。このように、モンゴル経済のために強制労働力として抑留日本人を使用することは、軍事捕虜に対する対応プログラムの要点であり、それはソ連邦に由来した。日本人と労働契約が結ばれることはなく、労働時間は規制されなかった。実際の労賃はきわめて低水準、もしくはまったく支払われなかった。労働と生活に関する安全と衛生の諸条件は確保されていなかった。

抑留者が収容された住居の条件は、われわれの時代から見ると落胆すべきものだった。基本的な設備である水道、下水道、電気照明が、都市においてもいつもあるとは限らなかった。冬服、冬靴、工具類、食料、医薬品がなかったり、わずかしかなかったりした。収容者の冬服が確保されていないことは、日本人軍事捕虜局の最大の問題のひとつだった。冬服がないため、多くの捕虜が作業に行くことができなかった。1946年1月末のデータによると、ズーンハラー収容所では捕虜の冬服が不足し、冬用の帽子がない者もいた。石炭の採掘を行っていたナライハ収容所では14人が冬靴を持たず、10人に冬用の帽子がなく、46人にミトンがなく、53人が履きつぶされた靴を使っていた。1946年10月によく冬服(綿入りのズボン、シャツ、冬用帽子、フェルト靴)の縫製作業が大規模に進められたので、1946年から翌年にかけての冬は、大量の凍傷患者を出すことなく、比較のおだやかに経過した。住宅の問題は深刻だった。農村住民の多くがユルト[遊牧民の天幕・訳者]で暮らしているこの国には、数千人もの抑留者を受け入れる用意がなかったというだけのことである。収容所の多くの建物は暖房を入れることができず、人々は寒さに苦しんだ。ホジルボランの収容所長S. シャラブは、次のように回想する。「凍傷を病む日本人たちは見るに耐えなかった。そのためわれわれは日本の兵士の長であるアラカワと話し合って、作業のあと、暖めた煉瓦を2個、捕虜に与えることにした。彼等は、それを寝床の下に置いたり足下に入れたりした。このようにして彼等は冬の寒さを生き延びることができた」[7, 250]。ホジルボラン収容所で道路建設に従事した元抑留者久保田設司は、1946年1月、自分たちは1日1人当たり0.75立方メートルのノルマが課せられた中、何にもまして恐ろしい寒さに苦しんだと書いた[21, 438]。捕虜の数が増加した多くの収容所では、マットレスが不足した。たとえば「白い兵舎」収容所では、1947年3月25日の資料

によると、576人にマットレスがなかった。多くの捕虜にマットレスがない事例は、「第一コロニー」収容所でも記録されている。414人が配置されたジャルガラント収容所は、特に厳しい状況だった。彼等には、必要な建物も暖房もマットレスも確保されなかった。

モンゴル人民共和国には、冬の条件にふさわしく準備された収容所も存在し、1946年初めの検査の監察結果によると、アルタンボラグ村の皮革工場の収容所がそのように認定された。多くの点において良好とされた場所は、ウランバートル市にある食肉コンビナート、研究所、および文化の家の収容所だった。

モンゴルにおいて採用された捕虜の食料配給量基準は、野菜、米、砂糖を含むものだったが、にもかかわらず、実際の生活において、収容者の食事はこれに適合するものでなかった。食事は、他の多くのことと同様、捕虜の居た場所に左右されることが多かった。多くの場合食事は単調なもので、米入りスープと黒パン、もしくはキビの粥だった。いくつかの収容所で、捕虜たちは休日に少量のモンゴル・チーズとビスケットを受け取った。時には塩漬け魚、牛肉、豚肉を食べることもあった。約80人の軍事捕虜は、オギー・ノール湖にある特別収容所に送られた。彼等の仕事は魚を捕って、モンゴルの収容所にいる軍事捕虜たち全体に魚を供給することだった。252人以上の者が、ボルノール収容所で農業と蔬菜作りに従事した。ズーンブレレン収容所では、156人が小麦を育てた。捕虜に食肉を確保するため、日本人軍事捕虜局は、1946年2月に、東ゴビ県(ドルノゴフ)におけるアンテロープ・モウコガゼルの狩猟を計画した。1946年2月に1944頭のモウコガゼルを捕獲し、3月には6000頭を捕獲した[7, 249]。モウコガゼルの猟は1947年も継続された。

こうした施策にもかかわらず、収容者の食肉確保水準は低く、多くの捕虜たちの回想によると、彼等は1-2回しか肉を食べられなかった。収容所当局は、多くの収容所において捕虜のために割り当てられた食料品を横領し、あるいは怠慢によって意図せざる食料品の毀損を招いた。元抑留者山田正敬の日記には、現地住民との接触が語られている。しかし、山田が書いたように、捕虜たちとの交際は厳しく禁じられていたが、山田が記すには、我々が近くのユルトから砂利を運んできた時、モンゴル人たちはためらいながら遠慮がちに我々を招き入れた。「我々はいくつかの単語しかモンゴル語を知らなかったので、ジェスチャーと微笑の助けを借りて対応した。モンゴル人はわれわれに、日本人はみなこのようにひどい状況かと訊いた。我々は何とか、長いこと腹一杯食べたことがなく、最後に肉をいつ見たか覚えていないと答えた。われわれは、自分たちが哀れに見えることを示された。ユルトの主人は、遊牧民のふつうの行動食である、乾燥凝乳チーズの入った大きな麻袋を開けて、われわれに気前よく分けてくれた。これはものすごく美味だった。これらの人々は、控えめだったが、暖かった。」[21, 419][ロシア語が原文と離れているので、原文を引用せずロシア語から訳した—訳者]

死亡率と埋葬

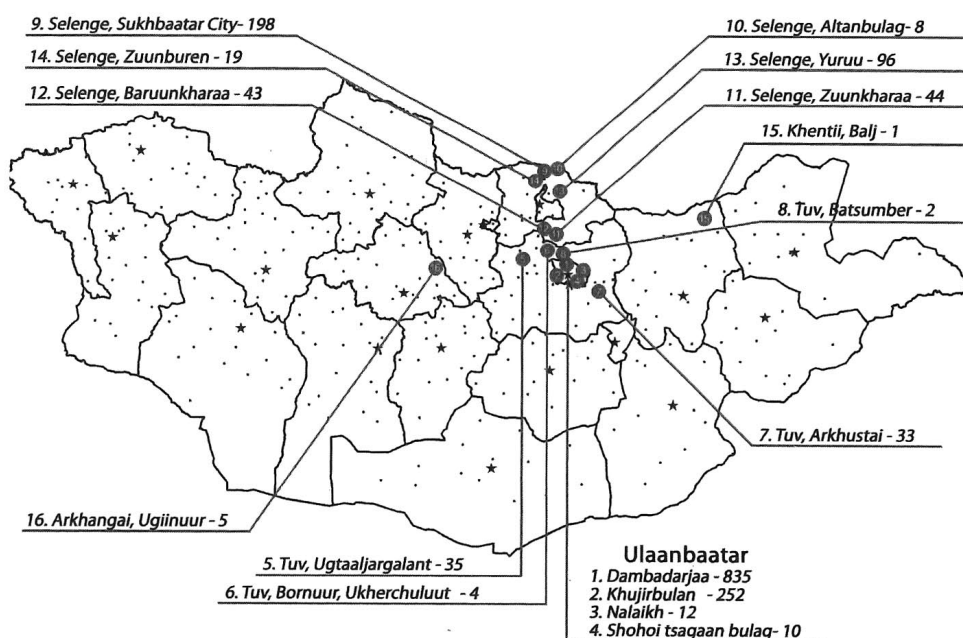
カロリー不足の食事、冬服の欠乏、寒冷な住居での暮らしは、チフス、結核、赤痢のような病気を蔓延させた。モンゴル人民共和国において12318人の捕虜のうち1615人が死亡したので、死亡率は13.1%となる。1945-1946年の間の冬は、モンゴルにおける日本人捕虜にとって特に苛酷なもので、1946年1月初め時点での死者数は202人だったが、1946年3月初めには553人に達し、死亡者全体の34.2%(つまり3分の1)が、冬の3ヶ月間に亡くなったことになる。これは、新しいたいへん厳しい気候条件に適応しなければならなかった時期であり、精神的・心理的にも難しい時期

だった。こうした条件のもとで弱った体は、病気にむしばまれやすくなった。食料品の不足は栄養失調を招いた。モンゴルにおける捕虜の死因は、肺結核 (36.4%)、肺炎 (7.4%)、赤痢 (8.3%)、栄養失調 (7.1%)、心臓病、チフス、肝炎 (2.7 ~ 3.8%)、脳膜炎、腸チフス (0.8 ~ 1.6%)、事故、労務上の外傷 (3.2%) だった。1995 年 6 月に日本側に渡され、『朝日新聞』に掲載されたモンゴルの資料では、死亡者は 1612 人だった。そのうち、結核が 583 人、赤痢 139 人、肺炎 121 人、栄養失調 111 人、回帰熱 80 人、チフス 73 人、他の疾病 393 人である。凍傷は 41 人の死因となり、骨折による死者は 34 人、他の原因 23 人、自殺 14 人だった [24, 532]。抑留者の治療のためスフバータル市に特別病院が設置されたが、病院は資材、医薬品、有能な医師の不足という困難を経験することになった。

抑留日本人の埋葬地はモンゴルに約 16 箇所あり、基本的には収容所の近く、すなわちこの国の北部に所在する (次表および地図 2 を参照)。

モンゴルにおける日本人墓地 [15, 113]

県	居住地名	埋葬者数
1. ウランバートル市	ダンバダルジャー	835
2.	フジルブラン	252
3.	ナライフ	12
4.	ソホイ・ツァランブラグ	10
5. セレンギンスク (セレンゲ)	スヘバートル	198
6.	ズーンブレン	19
7.	バルンハラ	43
8.	エレエ	96
9.	アルタンボラグ	8
10.	ズーンハラー	44
11. トゥブ	オグタールジャルガラント	35
12.	ボルノール	4
13.	アルホスタイ	33
14.	バトスンベル	2
15. アルハンガイ	オギーノール	5
16. ヘンティー	バルジ	1
合計		1597



地図2. モンゴル国内の日本人捕虜埋葬地

出典: ボルジギン・スフレ編『日本人のモンゴル抑留とその背景』(三元社, 2017年) 114頁。(出版社の許諾により転載)

教化

モンゴル政府のこの種の活動に関する情報は、非常に乏しい。ダシダワーは、モンゴルにおいては、抑留者をイデオロギ的・共産主義的に説得する目的を持った活動は、全体として何もなかったと考えた。この原因は、モンゴル政府に何かこれを行いたくない意図があったためではないと考えられる。早い話が、彼等には単にそれを実行する可能性がなかったということだ。たとえばソ連邦においては、このための強力な特別の政治組織があり、多くの資金が投入され、新聞の発行などが行われていた。これは全くの国家的プログラムだった。その上、モンゴルの日本人には、軍事捕虜向けの特別政治機関がハバロフスクで発行する『日本新聞』が、ソ連から送られてきた。ウランバートルの羊毛工場で働いた元軍事捕虜の山辺慎吾の回想には、この新聞は数ヶ月に一度、たまに来るだけだったとある。「それは、ソ連共産党の指導下で日本人活動家たちがシベリアで編集した、タブロイト版4ページ建ての新聞だった。この新聞は、モンゴルに抑留されていた日本人の思想に、大きな影響を与えることはできなかった。それ以外に、われわれはあまりに消耗し、飢えていた。『日本新聞』は煙草を巻くのにならなく、われわれはそれで煙草を巻いたが、満州の紙の質が低くて便所紙に不向きだった。」[19, 226]

帰国

日本人のモンゴルからの帰国の特徴は、抑留者は日本側に引き渡されるのではなく、ソ連邦に引き渡されたことだ。おそらくは、現地の収容所の状態が悪く、死亡率が高いことが原因か、ソ連の指導部は、1946年末にはすでにモンゴルから日本人を帰国させることを考えていたという推測があ

る。1947 年 3 月 22 日にモンゴル人民党中央委員会書記のツェデンバルがモスクワに送った電報は、このことを裏付けるものだ。彼はこの電報で、ウランバートルにおける重要な建設作業に従事している捕虜たちの帰国の延期を要望している [22]。このことが原因かも知れないが、モンゴルの抑留日本人の帰国は、もっと後の、1947 年 8 月 28 日のソ連邦閣僚会議決定第 3014 号によって開始された。これによって、モンゴルから 1 万 1 千人の日本人を送り出すことが予定された [2, 894]。抑留者はソ連邦のナホトカにある特別収容所に送られ、そこから海路を帰国することになる。ロシア連邦の国立文書館には、モンゴルからナホトカの第 380 中継収容所に入った日本人軍事捕虜と抑留者の輸送列車の数についての、1948 年 2 月 9 日付け報告書がある。この文書によると、最初の輸送列車が 1947 年 10 月 27 日にナホトカに到着し、6 番目の輸送列車は 1947 年 11 月 8 日に到着した。全部で 1 万 658 人が引き渡された [10, 442]。

輸送列車番号	到着日	日本人数				内訳	輸送隊長
		将校	下士官	兵士	文民		
1. 50596	1947 年 10 月 27 日	1008 人	57 人	179 人	654 人	118 人	ネルネロフ中佐
2. 50597/98	1947 年 11 月 1 日	2005 人	87 人	328 人	1211 人	379 人	サフチェンコ中佐
3. 50599/600	1947 年 11 月 3 日	1996 人	99 人	592 人	995 人	310 人	グサコフ大尉
4. 50601/602	1947 年 11 月 4 日	2000 人	122 人	443 人	1200 人	235 人	チモフェエフ大尉
5. 50603/604	1947 年 11 月 6 日	2150 人	147 人	499 人	1310 人	194 人	サラウーロフ中佐
6. 50605/606	1947 年 11 月 8 日	1526 人	96 人	338 人	921 人	171 人	ヤーシン少佐
合計		10682 人	608 人	2379 人	6291 人	1407 人	

モンゴル側の史料によると、抑留者を祖国に送り出すため、1947 年 10 月 10 日から同 26 日までの間に 11 の班が編制され、ソ連邦に出発した。道中 6 人が死亡し、1 名が治療のため残留した。ソ連政府に引き渡された帰国対象者の数は 10705 人だった [15, 112]。ナホトカに到着した人員数との差が 23 人あるが、それを説明する材料はまだ見つかっていない。

日本人にまつわる歴史的遺産記憶、改葬計画

1954 年、モンゴル人民共和国のユムジャーギン・ツェデンバル首相 (1916 ~ 1991) は、日本赤十字社から、行方のわからない 100 人の日本人軍事捕虜の運命について情報を求める書簡を受け取った。首相は内務省に、軍事捕虜の到着した人数と帰国した人数を照会した。公式回答は次のように述べる。1945 年 10 月 20 日から 12 月 10 日の間に、ソビエト連邦からモンゴル人民共和国に 12318 人の日本人が到着し、6 つの収容所に配置され、主にウランバートル市での建設作業に従事した。彼等のうち 1613 人が 2 年間に死亡し、10705 人が 1947 年 10 月にソ連邦に引き渡された [11, 165]。これと同じ頃、夫のコヤマ・ヨシトを探して、彼がまだモンゴルにいるのではと考えた日本人女性からの手紙が来た。モンゴル外務省は、これに回答する手紙で、コヤマは 1945 年 8 月にスパイ行為で告発されたと述べた。1955 年 1 月 17 日に、モンゴル赤十字からさらに回答があり、モ

ンゴルで収監されスパイ行為に問われた4人の日本人が、中国当局に引き渡されたとしていた[11, 166]。

モンゴルにおける[抑留者の]埋葬に関する情報を得ようと、日本の代表団が1956年と1966年にモンゴルを訪問した。しかしながら、外交関係が成立したのはようやく1972年である。死亡した日本人の家族が、その親族の墓参を初めて行ったのは、両国の国交が成立した1972年のことである。ウランバートル北郊のダンバダルジャーに、日本政府の資金によって日本人軍事捕虜の慰霊施設が建設され、日本人捕虜の墓地だった場所に2001年10月にオープンした。日本とモンゴルの両国政府の合意により、1995-1999年に、モンゴル領土内で埋葬された日本人捕虜の遺体を掘り出して火葬した後、その遺骨が日本に送られた。これと同時に、日本人軍事捕虜を記念する物の建設が決定された。1999年に記念碑が建てられ、その後記念館が建てられ、日本人の代表団や旅行者がそこを訪問している。記念館の隣には、そのためのモンゴルの職員が16年以上にわたって暮らし、秩序を維持している。

2002年6月21日、モンゴル大統領ナツアギン・バガバンディの招きによって公式訪問した秋篠宮とその妃は、モンゴルの首都郊外にある日本人捕虜の慰霊施設を訪問した。日本の皇室の人々は、死亡した日本人兵士たちに対して祈りを捧げ、慰霊碑に花束を捧げた。2004年、日本とモンゴル両国の赤十字社の共同事業が行われた。墓地の隣に小さな博物館がオープンした。インターネット上の情報は、残念ながらモンゴル語のみである[23]。

現在の歴史家たちが持ち合わせる文書・資料は、日本人のモンゴル抑留についていくつかの結論を導くことを可能にする。1万2千人以上の元日本軍兵士と将校をモンゴルに送ったことは、国際法の規範に適合したことであれば、軍事的・政治的必要性にかなってもしなかった。ましてやこれが文民にも適用されたのである。

日本人捕虜をモンゴルに派遣すること、およびその数の決定は、前もって行われたものではなく、1945年8月末に初めてなされた。モンゴルにおいて抑留者を担当する特別の部局の設置が、8月31日によく決定されたことは、これを裏付ける事実である。ここから、抑留者を受け入れ、配置し、住居、食料、医療サービス、用具、仕事着と冬服を与えることの、全体的な準備不足が生じた。抑留者の労働力を利用するしっかりした計画もなかった。モンゴルが、当初提示された抑留者の人数を過剰として断ったことが、この証拠である。平時に許容されない抑留者の高い死亡率は、このことの帰結だった。

抑留者を管理するモンゴルの政府機関は、ソビエトの経験と指導に依拠して活動したであろう。しかし、自前の「モンゴルのな」特徴があった。たとえば、抑留者を、食料を自分で得るため、猟や漁業に派遣したことである。モンゴル抑留者に対する共産主義教育は、ソ連で行われたような強さでは実施されなかった。しかしながら、その理由は、モンゴル政府が何か意図をもってそれを拒んだのではなく、むしろ、必要な能力と資金がなくてできなかったと考えられる。

日本側からの抑留者の運命に関する照会に対して、モンゴル政府は、ソ連政府の立場を向いた対応をとりつつも、より柔軟な姿勢を示したのだった。

文献目録

1. Батбаяр Ц. Монголия и Япония в первой половине XX века. - Улан-Удэ: Издательство ВСГАКИ, 2002. - 229 с.
2. Военнопленные в СССР. 1939-1956. Документы и материалы / под ред. М.М. Загорюлько. М.: Логос. - 2000. -

- 1118 с.
3. Карасев С.В. История плена: советско-японская война и ее последствия (1945-1956 гг.): автореф. Дисс... доктора ист. Наук. - Иркутск, 2007. - 30 с.
4. Карасев С.В. К вопросу о японских военнопленных в Монголии (1945-1947 гг.) // Россия и Восток: взгляд из Сибири в начале тысячелетия. - Иркутск.: Оттиск, 2002. - С.36-38.
5. Курас Л.В., Цыбенков Б.Д. Японские военнопленные в Монголии / Рец. На кн. Ч.Дашдаваа // Вестник БНЦ СО РАН. - 2014. - № 1(13). - С.260.
6. Курас Л.В. Вторая мировая война и Монголия: современная российско-монгольская историография // Ученые записки Забайкальского государственного гуманитарно-педагогического университета им. Н.Г.Чернышевского. - 2013. - №49-2.
7. Курас Л.В., Цыбенков Б.Д. Динамика численности и условия проживания японских военнопленных на территории Монголии (1945-1947) // Иркутский историко-экономический ежегодник. 2015. - Иркутск: Изд-во БГУЭП, 2015. - С.245-252.
8. Лузянин С.Г. Россия-Монголия-Китай в первой половине XX в. Политические взаимоотношения в 1911-1946 гг. - М., 2000. - 267 с.
9. Рошин С.К. Маршал Х.Чойбалсан. Штрихи биографии. - М.: ИВ РАН, 2005. - 158 р.
10. Японские военнопленные в СССР: 1945-1956. Сборник документов / Сост. В.А.Гаврилов, Е.Л.Катаасонова. - М., МФД, 2013. - 780 с.
11. Batbayar Ts. Mongolia and Japan in 1945-1995. A Half Century Reconsidered // Mongolia in the Twentieth Century. Landlocked Cosmopolitan / Ed. by Stephen Kotkin. - N.Y.: M.E.Sharpe, 1999. - 313 p.
12. Mongolia in the Twentieth Century. Landlocked Cosmopolitan / Ed. by Stephen Kotkin. - N.Y.: M.E.Sharpe, 1999. - 313 p.
13. Дашдаваа Ч. Японы олзлогдогсод Монголд. - Улаанбаатар: Бэмби-Сан хэвлэлийн газар, 2013. - 310 с.
14. 久保田設司『モンゴル虜囚熱河省承德から外蒙古ウランバートルへ』東京：善本社，1983年．300頁．
15. ガリンデヴ・ミヤグマルサムボ「モンゴル・日本両国の関係とモンゴルに残された日本軍将兵の遺骨について」『日本人のモンゴル抑留とその背景』東京：三元社 2017年．
16. 長島秀夫『モンゴル俘虜生活 800 余日』札幌：[自費出版]，2002 年．112 頁．
- 17.『日本人のモンゴル抑留とその背景』東京：三元社，2017 年．174 頁．
18. 桜田虎男『モンゴル抑留記』国立：生涯学習研究社，1997 年．268 頁．
19. 山邊慎吾『ウランバートル捕虜収容病院』東京：草思社，1991 年．370 頁．
20. 山浦重三，蒲原正二郎，石井栄次『ウランバートル吉村隊：外蒙の幽囚』長野：明日香書房，1949年．194頁．
21. ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会編『捕虜体験記』第 6 巻 ザバイカル地方、モンゴル編．東京：ソ連における日本人の捕虜の生活体験を記録する会，1988 年．500 頁．
22. URL: <http://www.medee.mn/mobile.php?eid=70573>
23. URL: <http://www.mnb.mn/i/105214>.
24. 長勢了治『シベリア抑留全史』東京：原書房，2013 年．617 頁．